出してくれました。特に、「倶楽部」は、発音と表記と意味が見事に一致しているという傑作です。

この「倶楽部」ということばは、1文字ずつ意味を拾っていくと「倶（とも）に楽しむ部」となり、現代では、「○○カントリー倶楽部」というように使われています。

▲1枚目の絵はがき

その昔、蒲郡にもちょっと珍しい倶楽部がありました。その名を「落葉倶楽部」といいます。

右は、その倶楽部が発行した絵はがき4枚の内の1枚です。1列に並んで入口のアーチをくぐる人々が手に持っている道具は、スキー板とスティックですが、ゲートの先の山には雪らしきものが見当たりません。その理由は2枚目の絵はがきで判明します。

▲2枚目の絵はがき

雪のない斜面を滑走する人々の足元一面に敷きつめられているのは、なんと落葉。世界最初というううたい文句の「五井山公園落葉スキー場」は、少なくとも第3スロープまであり、落葉スキーの発祥地記念碑も建てられていました（3枚目の絵はがき）。

「雪がめったに降らない蒲郡でもスキーを楽しみたい！」という思いが伝わってくるようなユニークな倶楽部です。

▲3枚目の絵はがき

また、かつてこの五井山から海岸までをロープウェイで結び、五井山一帯を一大観光地にしようという壮大な計画を持っている人がいました（残念ながら戦争が始まったために、中止となってしまいましたが）。その人は、コンクリート製の竹島橋や、三谷の弘法大師像を造り、現在の「観光がまごおり」の基礎を築いた滝信四郎です。

この滝氏が、昭和5年に常磐館の西に開業した大衆娯楽施設が「共楽館」です。厳島神社を模したという、緑と朱で彩られた鮮やかな建物で、ビリヤードや卓球ができる娯楽室、売店、射的場、演芸場、浴室、食堂を備えていました（右下写真の円内）。

「共楽」ということばは、分厚い『広辞苑』にも載っていません。想像に過ぎませんが、明治の人たち同様、「享楽（楽しみ）」を「共楽（共に楽しむ）する」館、ということばの遊びをしたのかもしれません。

▲昭和5年ごろの竹島橋付近

新しいことばや、新しい遊び、そしてちょっとしたことば遊びなど、これまで誰も思いつかなかったことは、「学」んだものを杓子定規にのみ込むのではなく、自由な発想で「楽」しく転換することから生まれるのだと思います。肩だけでなく頭のコリもマッサージでほぐせたら……と思うかちかちアタマの今日このごろ、反省しきりです。

蒲郡市博物館
学芸員 小田美紀